週刊ＲＯ通信

――２００４年――

2004.1-2004.12　No.487-No.538

奥井　禮喜

有限会社ライフビジョン

週刊ＲＯ通信　２００４年（2004.1-2004.12）

目次

理性的に推測してみると……6
成人の日に考えた……10
湖都に向かってマイクを握る……14
湖都の市長選挙は勉強になった……18
人を信頼すること……22
そんな無茶な……26
お疲れ様の構図……30
新人類はどこへ行ったか……34
現代の狂気・荒唐無稽について……38
組合の経営参加……42
現代の人間疎外……46
いい仕事をすればいいのだ……50

立法を機械設計に喩えれば……54
慎重に扱いたい裁量労働制度……58
イラクの泥沼化を避ける工夫……62
年金改革論議を基本からやろう……66
人質批判問題から透けて見える……70
連休弛緩、私の場合……74
弛緩、政治家などの場合……78
中国旅行雑感……82
拉致問題と国交正常化……86
「前向き」という思考……90
大人社会の問題……94
年金論議をきちんとやろう……98
「国を想い　国を作る」の危惧……102
平和的国際貢献の胡散臭さ……106
あんたにゃ言われたくない……110

いずれも兜の緒を締めよう……114
組合役員の誇りを持とう……118
アーミテージ発言と憲法論議……122
ひさびさの快感と不快感……126
サッカーで熱くなる訳……130
敗戦記念日に思い続ける……134
夏の終わりに……138
組合新役員の皆さまへ……142
奥の院で「毅然と立ち向かう」方々よ……146
唐辛子は油炒めしなければ辛さが足りない……150
感傷的欺瞞性……154
論語を読む……158
コミュニケーションと官僚主義……162
新聞が食い足りない理由……166
企業の社会的責任（ＣＳＲ）政策……170

一物二価、さすが旧国鉄感覚……174
アイデンティティの確認……178
自衛隊継続派遣をするな……182
ナショナリズム台頭の危惧……186
日中関係シンポジウム……190
自衛隊イラク派遣の継続……194
閑話休題……198
恒例年末パーティ……202
胸襟開いて話し合いました……206
ある労働者への追悼……210

あとがき……215

No.四八七

理性的に推測してみると

元日早々、首相が国際的話題！を作られた。わが国固有の歴史・伝統・習慣たる初詣であるとして靖国神社へ参拝した。さっそく中国・韓国から憤りと抗議のお年賀である。せっかくの年初、もうちょっと大きなテーマを考えたかったが仕方がない、首相の狙いを推測してみよう。

靖国へ首相として参拝すれば必ず抗議がくるのは先刻承知の行動だから、周辺国からすれば確信犯である。国際協調、国際平和を高らかに主張する首相が目指すべきは諸外国の信頼獲得であろう。にもかかわらず、何ゆえ、わざわざ不信感を招くような行動を執拗に繰り返すのであろうか。

国民一般は、すでに戦争体験なき方々が大部分で、感性としてはかの戦争に関する罪の意識がない。学校でも歴史をきちんと教えていない。自分で学んでもいないし、学ぼうともしていない。しかし、未来に向かってわが権益を獲得するために武力行使も辞さずなどと考えるような人は、もちろんいない。

民族・国家・国民意識などは概して低い。政治的にもお茶の間政治談議がいいところである。最大の関心は無病息災・家内安全、今の暮らしが持続すればいいなあと願う。初詣でお願いするのはこんなところだ。

中国堯帝が微行のおり、老人が「日出でて作り、日入りて休む。井掘りて飲み、耕して食う。帝力我において何かあらんや」と歌っていた。何も支配せぬ政治、支配を意識させない政治が理想とされたというが、まさしく大方の日本人の政治意識とはこんなところではあるまいか。

だから、首相の靖国参拝が他国から指弾されて、首相が歴史・伝統・習慣であって犠牲となられた先人に感謝を捧げ、なおかつ平和祈願したのだと釈明すれば、「何もその程度のことでがたがた言わなくてもいいではないか。」「かの戦争は十分遠くになったではないか。」「いつまで箸の上げ下げを遠慮せねばならんのか」と感情的に傷つく可能性がある。

その結果、受動的ではあるが民族・国家・国民意識を揺さぶられる。首相の真の狙いはこの辺りに絞り込まれているのではあるまいか。なぜなら依然として首相の力とは『人気』に尽きるのであるから。

そもそも政治屋は選挙に当選して政治家たることを第一義に考える。「猿は木から落ちても猿だが、政治家は落ちたらただの人」。権力の座を手中にすれば、今度はそれをいかに持続するかに腐心する。そのためには国民意識を固めなければならず、手っ取り早いのが外敵を意識させることである。

外国へ行くと大概の人が「日本人であった」と意識する。なぜなら、自他の違い、孤独感、自分を客観的に眺めるとき初めて人は自分とは何かに気付かされるからである。これ、古今東西、権力把握した人間が常套手段としてきた陳腐な手法に過ぎない。理性的な人はそんな手には乗るものかね。

中国にせよ、韓国にせよ、わが国との円滑な関係を期待しているのは当然である。わが国との経済的交渉などで優位に立ちたいから、いつまでも戦争加害を忘れるなと吼えるのであろうという見方もあるが、それはいささか穿ち過ぎである。加害と被害の関係は絶対に違う。

心ならずも命を落とされた方々の犠牲の上にというのは、国内的説得力しかない。心ならずの方々も含めて、それと心ならずも敵対して戦わざるをえなかった国の方々の落とされた命はいったいどういうことになるのか。しかも、わが国内において心ならずも

命を落とされた方々は靖国に合祀された方々だけではない。戦ったのは兵隊さんだけか。心ならずも戦わざるをえなかった圧倒的多数の日本人をどう考えるのか。まして、加害者が慰藉の心情を本当に持つのであれば、被害者の気持ちを忖度し、尊重せねばならない。

われわれが欲しいのは世界各国からの信頼ではないのか。首相がいかなる思想信条を持とうがそれは問わない。しかし、首相という公職にある限りはわれわれを洗脳しようなどと考えないでもらいたい。

慎太郎的発言は、率直過ぎ、短絡的過ぎであるから、支持者においても批判が出る。さらに建国義勇軍的手法などは威嚇・暴力そのものであるからよほどのとんちんかん以外は支持しない。首相のそれは感情的に国民相互間に軋轢をもたらし、誤解・偏見を拡大させる。それは「陰険」にして「危険」な手法である。私は断固反対する。

2004.1.5（月）

No.四八八

成人の日に考えた

『青春は失策、壮年は苦闘、老年は後悔』（ディズレーリ 1804-1881 英）という言葉がある。なかなか言いえて妙ではある。「青春とは心の若さを言うのである」という自己満足よりもリアルで、自戒があり、好きな言葉である。成人式に騒動引き起こして日本全国にアホを晒した連中がいたが、ここのところ静かである。某市は託児所作って成人式においでと招いているらしい。その後、何かと関係者の努力が続けられているのであろうか。それはともかく。

昔の資料を漁っていたら、一九六〇年代には会社や組合なども成人式を開催していた。「他人のことが分かる立派な労働者になりたい」などと代表者の言葉が残されている。写真を見ると、男は背広もいるがだいたいは菜っ葉服だ。しかし、妙に新鮮な感じがして、懐かしい。

新成人に期待するというような言葉が空疎に聞こえるようになったのはもうだいぶ以前からである。子供の日に街頭インタビューで「大人になったら何になりたい？」と聞

いたら「サラリーマンにでもなります。」と答えてくれたらいいほうで、「大人になんかなりたくありません。」慌てたアナが「どうして、お父さん、お母さんが嫌いなの？」「好きですよ。」「じゃあどうして！？」。

「だって、周りに気ばかり遣ってしんどいみたい。ボクは今のボクでいるほうが得やもん。」一九八〇年代の初めごろであったか、テレビ見ていて大笑いしてしまった。サービスされることが当然だと思って育っている方々に、他人のことを慮れなどと言うても、なかなか伝わらないものであろう。しんどい話だ。学費をバイトで稼いで苦学するなんてのはとっくに少数派になった。バイトは日々をエンジョイせんがためにこそあるらしい。お父さんは会社に出かけ、お母さんはささやかに内職、ボクは新聞配達なんてのは一九五〇年代的風物詩、麗しい家族愛であったなあ。

青年には限りない未来がある。というような言葉はいささか気恥ずかしいように感ずる。しかし、一九六〇年代には少しも恥ずかしい言葉ではなく、結構本気で語っていた。恥ずかしいのが正しいのか、臆面なくそう語られるのがいいのかと言えば、やはり語られるほうがよろしかろう。

何ゆえ、限りない未来があると気分よく言えなくなったのか。リアルになったのだ、

現実を皆様がよくご存知だからである。たとえば会社の中では中高年がぼろ糞に言われる。今や熟年などという埒もない言葉も語られない。中高年、ダサい、役立たず、給料のもらい過ぎetc、若者たちはそのように指弾しつつも、つくづく考えればそこに見るのは遠からず自分の未来である。

高齢者が社会の余分、酒は熟成すればするほど価値が上がり、ありがたがられるけれど、人間の熟成たるや正反対の扱いを受ける。老人が幸福でないのであれば、実は青年におかれても幸福ではないのである。天に向かって唾棄するようなもの。こんな至極当然の理が常識とならない社会とはいったいいかなる価値のある社会であろうか。

私がかつてお世話になった職場の同窓会が回を重ねて二五回、今年も和気藹々、愉快な先輩・後輩相集い延々六時間に渡って談論風発、歓声、笑声賑々しく、飲みかつ歌い、さざめき、また来年の再会を約して散会した。同じ顔ぶれ、月日が過ぎて、かつての青年たちはまた一歩、一歩と齢を重ねているのだけれど。さて、昔と今と何が変わったのだろうねえ。

たとえば職場において、上にばかりへつらうタイプは「平目」と言われ軽蔑された。上司の言葉であっても間違いであれば堂々部下が意見を述べるのは正しい勤め人であっ

た。もちろん誰でもかれでもがそのように元気があった訳ではない。気の弱い奴も少なからずいるから、言うべき時に言えないという事態は当然ある。それは「恥ずかしい」という認識を持った。

今はどうか。「平目」が主流である。堂々とぶち当たるような気骨のある奴はバカ、アホとみなされる。みなされるだけではなく、バカじゃ、アホじゃという意見が堂々まかり通る。そこには本筋の恥が姿を消して損得・利害に聡いことこそが正しいという打算的・功利的気風が支配している。

さて、成人の日とは二〇歳になる方々だけの日ではなかろう。すでに大人たるわれわれが堂々たる生き方をしているかどうか考えなくてはなるまい。

2004.1.12（月）

No.四八九

湖都に向かってマイクを握る

三年前、友人が大津市長選挙に立候補した。現職が六選には出馬しないと表明し、自民党・民主党、連合(組合)が友人に白羽の矢を立てた。では、やるかと腰を上げたら、現職が前言撤回し六選出馬すると言う。推挙したそれぞれの組織また前言撤回し、現職支持に回った。

何が現職にそうさせたのかは分からない。その訳の分からぬ事情に、友人と周囲の市民が憤り、現職に挑戦しようという話になった。団体という団体、組織という組織はすべて現職に回った。およそ勝ち目のない挑戦であったが、その義憤はまさしくプロの政治家だけが政治家ではないという義憤である。

そんな次第で、私もおっとり刀でささやかな応援に馳せ参じた。多勢に無勢、当初ジャーナリズムはわが友人を泡沫候補扱いしていた。友人は名前も顔も知られていない。その扱いは当然と言えば当然だった。しかし、予想外の善戦で、惜敗はしたけれど四万六千票対三万票という結果であった。

その後、六選果たした現職が、任期途中の昨一二月突然辞任するという結末になった。もともと高齢で相当くたびれておられた。それを周囲は十分に知っていたはずである。現職本人もけしからんが、いかなる思惑にせよ、その現職支持に回った政治家の方々も大きな責任がある。

で、急遽一月一八日告示・二五日投票という次第になった。今度は六人が手を挙げるという次第になった。もちろん、わが友人も再び挑戦する。私も再び応援に馳せ参ずる。全員が新人であるけれど、さまざまな団体・組織を背景にした他候補者に、かつての次第の責任なきや否や。

石山寺門前市で賑わう人々に向かって演説する。ショボショボ雪が降りかかる。この日、気温は一度しかなかった。寒いのではあるけれど、皆様に語りかけていると身内が熱い。私が初めて古刹石山寺を訪れたのは中学一年、あれから四五年以上が過ぎている。寒々としているけれど懐かしさもある。瀬田川はゆっくりと無声映画のように流れている。当時の私を思い出すような中学生たちが、さざめきながら通り過ぎる。門前市に集まった方々がちらちらとこちらを見ながら買い物を楽しんでおられる。無粋な奴めというような視線は感じない。立ち止まって耳を傾けてくださる方も少なくない。

庶民の日常に政治を語りかける自分を振り返りつつ、素人政治家として、清々しい心地を抱え、また次の遊説地へと走る。

私は国士と冷やかされたこともある。結構政治的主張をする。たとえばこの週刊ＲＯ通信がそうである。大新聞論説委員を経て現在某町長をやっておられる尊敬する先輩には、「主張ばかりじゃだめだ。そこまで言うなら区議会議員にでもなってみろ」とパンチ食らわせられたこともあった。

言うだけではあかん。確かにそうだ。そうではあるのだけれど、皆が全部政治家になる訳にもいかない。というか、いわゆる政治家しか政治的主張ができないというのも、おかしな話である。いわゆるジャーナリズム関係の方々しか政治的主張をしないというのも、また、おかしい。

敗戦後、わが国は民主主義の社会となった。それから今年は五九年目。わが民主主義は成長したのであろうか。おりから憲法改正の論議が政治家の皆様において盛んになされつつある。選良の方々にお任せして、われわれは事の推移をひたすら見つめていればいいのであろうか。そうではなかろう。

そもそも選良と言いつつも、彼らは憲法に基づいてその立場を獲得する。本来、憲法

は国民において意思決定されなければならない。間接代議制は憲法があってのものであるから、選良の議論の前に、まず国民において憲法の論議があって然るべきである。

憲法を論議するのは本来、国民においてでなければならない。意識調査などによって、いささかの意思表示をさせていただく、という程度では何やら国民という名前が恥ずかしいというものだ。政治家が憲法論議をするのはよろしいが、その前に国民一人ひとりこそが、それをなさねばならない。

いわゆるプロの政治家は国民の僕であって、国民が彼らの僕なのではない。選挙のたびに「諸君、投票へ行こうぜ」と呼びかけがあるが、たかだかたまの選挙においてしか意思表示が認められないというのは民主主義ではない。私は意思表示する国民でありたい。政治家とは国民でなくてはならない。

2004.1.19（月）

No.四九〇

湖都の市長選挙は勉強になった

今回、私が応援に出かけた友人の大津市長選挙結果が出た。最悪でも次点になってほしいと願ったが次々点であり、すかっと完敗だ。悔しいが現実である。しかし、負け惜しみではなくかなり現実というものが見えてきた。友人が再挑戦するのかどうかは分からないが、いささかの感想を書く。

わが候補者は頭が高いと言われ続けていた。確かにひたすらお願い、ぺこぺこ頭を下げ、愛想振りまくタイプではない。駅頭などで握手するにしても、頭を下げるにしても最後まで格好が決まらなかった。不器用の典型だ。

短期間の選挙戦であるから、街頭活動のパフォーマンスは値千金である。陣営の仲間が気を揉んで忠告するのだけれど効果が出ない。しかし、考えてみれば大事なことは政策を主張し、選挙民に考えていただくのが本筋なのであって、ぺこぺこ効果をあげへつらうのはおかしな話、本末転倒である。

市民としての目線、政策主張の中身を皆様に理解していただきたいのであるから、公

開討論会においてわが候補が堂々と他を圧する論陣を張ったという報告には快哉を叫んだものである。当選候補、次点候補はいずれも組織をバックにしておられたが、公開討論会には登場なさらなかった。

わが候補は演説がうまくないとしばしば指摘された。しかもずるずる長くなる。これは陣営としては真に困るのであって、いわば商品のパッケージがくたびれているようなものである。「うまく喋れ」と注文つけても、一朝一夕に直るようなものではない。ま、下手は下手なりに心が伝わればいいのだが。

選挙対策部隊はまったくの寄り合い世帯である。組織的活動が格好よかったとはお世辞にも言えない。すったもんだの繰り返しで、「もう止めた」と喚いた方々も少なくなかった。理屈で言うならば組織が最後までできず、組織的行動はお粗末としか言いようがなかった。にもかかわらず、組織候補に痛烈な恐怖感を与えたのは事実である。

その証拠にかなりの謀略があった。ことは公党の行動に関するから、ここでは書かないけれど、選挙対策チームの中に間諜が潜り込んで、かなり暗躍していたことは間違いない。公党の行動に関するし、まして個人的投票行動の中身は分からないので状況証拠以外はないけれど。

わが候補者が挑戦したのはかかる旧体制に対してであった。組織なく、まさしく市民の立場から堂々選挙戦に臨んだのであって、敗戦したけれど、私には清々しい心地をもたらした。投票率四二・五〇％、先回は四三・五四％である。投票率が下がってしまったところに、われわれの本質的敗因、本質的課題がある。当選者二八、七六六票（市議一七人、一五〇団体）、次点二四、三八一票（連合）、わが候補二一、四二五票、私の読みより一万票は少なかった。

昨今、政治や政治家を嫌う方々が圧倒的である。政治を一部の方々にお任せするから、時間が過ぎれば利権政治が蔓延るようになり、それが深化して不埒な事件になったりもする。さらに政治・政治家嫌いが深化する。これが今の政治・政治家嫌い現象の循環である。お任せ意識を克服しなければ、この循環を断ち切ることは不可能である。

われわれが心底反省しなければならないのは、この政治・政治家嫌いの風潮がなにゆえ主流になってしまっているのかについて、有権者の方々に考えていただかねばならぬが、十分に果たせなかったことである。政策はいずれの候補者もそこそこ主張なさる。似たようなものになる。実行するまで本心か否かは所詮分からない。そこで選挙戦はパフォーマンス合戦に堕落する。

私はこの選挙戦にどっぷり浸かった訳ではない。自分の予定もあるし、実力にもさしたるものはない。しかし、選挙戦を通して、何人かの方々と話し合う機会を得た。彼らは共通して大津市の政治的状況を嘆いておられた。いろんな組織に属しておられるにもかかわらず、組織の行動とは異なった発言を少なからずしておられた。そこに市民としての良心を感じ、嬉しかった。

政治を通じてご飯を食べようとしているプロとは異なる意見が彼らの口から語られた。それが今回の選挙では実らなかったけれど、少なくともわが候補者が立ったがゆえに出された意見であることは間違いない。敗戦はわれわれの力不足のゆえである。しかし、展望が見えたのも事実である。

「選挙は面白い」。顰蹙を買うことを怖れず、私は言いたいのである。

2004.1.26（月）

No.四九一

人を信頼すること

某社ライフプランセミナーで二日間語り、主張し、拝聴し、おおいに交流できた。場所は嵐山、先週大津の選挙では厳寒、徹底的に寒風に苛められたが、今度は往路からほかほかほのぼのまるで一足早く春が訪れたかのようだ。保津川下り終点、舟がときどき行き交う。ロケーションは最高。

どうしても最初は雰囲気が硬い。忽然現れたどこかの馬の骨が雰囲気を和らげようとしてジョーク頻発しても、そうは問屋が卸さない。しかし、しばしすると眼が和み、口元が緩み、笑い声が漏れ、やがては腹の底から笑い声がほとばしる。昔は研修屋になろうなどと考えたこともなかったけれど、この瞬間が研修屋冥利に尽きるときだ。

落ちこぼれ社員の私がまだ職場で下手な図面を引いていた当時、なにしろ職場は賑やかで面白かった。世界一の開発に関わり、世界を駆け回っておられる諸先輩がつと来られ、他愛ない会話をしているわれわれの間に入り、小気味のいい経験談をなさる。実に談話の達人が多かった。巧まざるユーモア。

現場技能者の方々も声は大きいし、荒っぽい話し振りではあるが、人情に富む。給料日の翌日、前夜細君と家計のやりくり巡って立ち回りしたなんて話も飛び出してきて、皆様の生活ぶりが自然に理解できた。大声、大笑いこそ真っ当な勤め人の表現。ひそひそ話は陰謀中と決まっていたぞ。

開発会議などに通りすがりの他職場の方が口を挟んで大論議になるなんてことも珍しくはなかった。団塊世代が入ってきて、「先輩たちはどうしてあんなに衝突するんですか」と呆れた表情していたが、表裏なき熱いコミュニケーションの時代であったなあ。今の方々には分からないかも知れないけれど。

要するに皆が期せずして開放的コミュニケーションを実践していたのである。酒を飲んで口論は普通の景色、しばしば喧嘩にも発展した。しかし、まさしく「粗にして野だが卑ではない」の人間像が氾濫していたなあ。

コミュニケーションとは物理的に言えば、作用・反作用の関係である。摩擦もあるし、衝突もある。作用が大きければ反作用も当然大きい。丁寧・慇懃にやっておけば摩擦・衝突は一応発生すまいが、双方理解の段階とは程遠いのじゃあるまいか。つくづく考えてみたいところである。本気で考えよう。

ところで私が最初に職場コミュニケーション状況の変化に気付いたのはずいぶん早く、一九七〇年代後半であった。当時、われわれの組織は世間に先駆けて中高年層の勉強会を全国規模で展開していた。それも半端ではない。二泊三日の日程で朝から晩まで数十人がみりみりしこしこやっていた。

ある研修最終日、参加者に感想を尋ねると「こんなに喋ったり笑ったりしたのはひさしぶりだなあと言われた。「なんで！仕事中によく喋るじゃないの」。「最近は仕事の管理が進み、マニュアルが整備されてきたからな、喋っているのは極論すればトラブルが発生している時だよ。」「ふーん。」

そんなものかなあと思った。さして危機感も抱かなかったのだけれど、今にして思えば、その会話は警鐘だったのじゃあるまいか。成果主義、「役立たず」論などが職場に蔓延して、お互いに疑心暗鬼が強くなったのも事実であるけれど、コミュニケーション後退の根は案外深いかも知れぬ。

また、春闘の季節が来た。日本経団連は春闘ではなく「春討」にしようと呼びかける。年頭「内需中心・経営改革・人材育成・攻めの経営」を経営者に呼びかけ、いわゆる恒例春闘白書においては「経営者は高い志を持とう」と格調高いのだ。その志や好ましい、

おおいに歓迎する。

しかしながら、業績不振、経営が思わしくなく、そうでなくても「物言えば唇寒し」の勤め人社会、圧倒的多数派はひたすらだんまり決め込んでいるのじゃあるまいかねえ。裸の王様になっちまっている経営者少なからず。私としては、くれぐれも経営者の皆様に警鐘鳴らしたいのであります。

少し異なった表現させてもらえば、組合またかつての強面などなく、経営と組合員のサンドイッチ、薄っぺらハムよろしく各方面に気遣いしておられるのが実情にて、「春討」を本当に構築していかれるならば、その面からもおおいに結構だ。私は今春闘が本当に「春討」になれば何よりだと考える。

表面的な労使関係の安定の水面下で、さまざまな不協和音が沈殿しているのではあるまいか。今年の春闘、「信頼」の意味を考えてみたいものである。

2004.2.2（月）

No.四九二

そんな無茶な

パキスタンで「核開発の父」と呼ばれたアブドル・カディール・カーン博士が、イラン・リビア・北朝鮮へウラン濃縮など核技術を流したことを認めた。理由は金だそうな。そしていともやすやすムシャラフ大統領によって赦免された。イラン・リビアの遠心分離機がオランダ・ウレンコ社(英独蘭合弁)のものと似ており、カーンが同社で働いていたこともあるという。

ムシャラフ大統領はかつて政府が関与して国際的闇市場で機械・材料など調達したことを認めたが、今回の事件はカーンの単独犯行であると白を切っている。その強気の背景には、米国が中東問題絡みでムシャラフ政権を糾弾も何もせず「だんまり」を決め込んでいることがあるのは間違いなかろう。

それにしても、つい少し前「ならず者国家」と威勢良く罵った米国にしては二重基準である。ご都合主義である。犬がご近所で悪さをしても、自分には尻尾を振っているから可愛いというのであるか。まったく不愉快千万だ。これではチャンバラ映画の二足の

草鞋と同じである。低俗であるな。

仮に個人的犯行であるとしても、「ごめんなさい」で赦免するという鷹揚さが理解できない。ひもじい兄弟のためにパンを盗んだのとは違うのじゃなかろうか。まして、並みの人間とは異なる。国を代表する科学者が、倫理・道徳にもとる犯行をしたのである。こういう場合にこそ「市中引き回しの上」云々という冷徹さが求められる。

思うに、かかる超法規的措置が行われるような国家のことを「無法者国家」と呼ぶべきであるぞ。ムシャラフさん。

国際社会において書生っぽい正義感など振り回しても詮無いことではある。それが現実と言うものだ。そういう立派な大人的見識があるのは百も承知であるけれど、あまりにおおっぴらに展開されるパキスタン的・米国的ご都合主義を唯々諾々と認めるのは真っ平御免だ。

米国でも英国でも、イラクに大量破壊兵器が存在したのか否かを巡ってだいぶ賑やかになっている様子。これまた「ごめんなさい」で済まされることかどうか。せっかくの命がけ自衛隊諸君のイラク復興支援活動の意義が霞んで見える。まして日米同盟関係優先して展開されるのであるから尚更だ。

少し中長期的に考えれば、中国はますます国際社会において政治・経済的存在感を強めるだろう。米国の外交戦略の中心が中国になるのは当然の流れである。やがておたおたするのはわが国ではあるまいか。わが国は小判鮫よろしく、米国のどてっ腹にくっついて回遊し続けるのであろうか。

もちろん、そういう方法があるのを否定できない。しかし、それは政府・与党の方々、天下国家を憂うる政治家の方々がもっとも嫌う思想ではあるまいか。なんとなれば自主独立なんて言葉と正反対だからである。そんな次第で国民各位が国民たる誇りを持てるであろうか。

学校で日の丸掲揚し、君が代を歌わねばけしからんと言う。それにしては自主独立の基準がふらふらして落ち着かない。国家・国民意識というもの、パフォーマンスではないし、ファッションでもない。

某新聞は日露戦争一〇〇年に当たって歴史を学べと主張する。歴史を学ぶことは大賛成であるけれど、その結論が司馬遼太郎描くところの明治人たれと言うのであるからあほらしい。司馬史観などは歴史にあらず、本質はどこまでも小説である。この牢固とした観念主義にはうんざりさせられる。

国家・国民意識の大切さを吼えまくる権力者が小判鮫的行動を平然となす。強い者には従うのがもっとも具合がいいという行動をとる。それは庶民たる方々の脳裏にじっくり浸透している。かかる状況において、わが国民諸君が威風堂々の人生をめざしうるや否や。嗚呼。

「長いものには巻かれろ」という俗語がある。俗語とてバカにはできない。これ、現実社会をひらひら泳ぎ抜くには極めて大切な処世術である。偶然か必然かは知らないけれど、会社社会においても言いたいこと、言うべきことを発言する人が圧倒的に少ないように見受けられる。

政治は最高の道徳である。いや、あらねばならない。わが国は米国の一州にあらず。憲法論議がだいぶ賑やかになってきた。現実政治家にお任せしてはまさに一〇〇年の計を誤る。ますますその思いが強くなってきた。

2004.2.9（月）

No.四九三

お疲れ様の構図

最近。朝から「お疲れ様」という挨拶が市民権を得ているらしく、あちこちで耳にする。これで私などは調子が狂う。いくらなんでも朝からお疲れ様はないだろう。と、思いつつも、いや待てよ、この挨拶は結構本音そのものではないのだろうか。

昨日の仕事疲れが残るのか、然り、残っているのである。しかも当節サービスという名のただ働きが流行中だ。いかにプロフェッショナル、仕事大好き人間だとしても、暗黙の圧力で残業時間を記録しないのは不愉快千万に違いない。同じ疲労でも快・不快によって天地の差があるもので。

通勤にもお疲れだ。首都圏などでは片道一・五時間、往復三時間以上の方々がぞろぞろおられる。電車内においては痴漢に注意するだけではなく、注意しないといつ痴漢扱いされるか分からないという緊張感漂うのであって、長時間通勤の疲労が増幅されるという按配である。

はたまた家族関係にお疲れなのでもあろうか。要するに「よき家庭人・よき会社員・